

背広姿減り学生風の客 路上飲みの大声



戻った「花金」 変わる新橋

緊急事態宣言の全面解除から1カ月余。新規感染者数が減少傾向にあるなか、東京の夜の繁華街はどう変わったのか。「花金」の5日夜、サラリーマンの街・新橋（港区）を歩くと、人出や客足の変化に加え、様変わりする街の姿を心配する声も聞こえてきた。

午後7時半。立ち飲み居酒屋「Stand泡Bar JokeR」はカウンタ―と二つのテーブルを10人ほどが囲み、笑い声が絶えなかった。久々に来店したという会社役員の高津宏実さん（48）は「ずっとリモートワークだったから本当にうれしい」と話した。

都は10月25日、感染対策をした認証店を対象に、11カ月ぶりに時短要請を全面解除。実際に客足は戻ったのかどうか。記者は比較するため、緊急事態宣言中の9月24日と今回の5日、同

じ金曜の午後6時から1時間、JR新橋駅近くの「新橋西口通り」に立った。

街に向かう人を数えると、484人から1090人と倍以上に増加。通りやその周辺にある計164の飲食店をみると、店を開けているのは81店から149店に増えていた。周辺の見回りボランティアを続けているという男性に聞くと

「現時点で人出はコロナ禍前の8割程度」という。行き交う人が増えた一方で、客足が戻ったかどうかの店主らの受け止め方は様々だ。通りに面した串焼き店の女性店長は「常連も多い近隣の大企業はまだリモートワーク。会社員の客の戻りが悪く、元に戻るまではまだかかるかも」。

近くの公園には、コンビニで買った缶チューハイを飲みながら同僚と談笑する都内の会社員男性（35）の姿があった。「コロナになってから路上もありかなど。少し飲むだけならわざわざ店に行かなくても」。駅前

には家路を急ぐ人の姿も。「まだ飲みに行くのは慎重にならなきゃね」と50代会社員男性。同僚と会社から直帰するという。

コロナ禍を経て、街の様子の変化を心配する声も複数あがっている。駅西口周辺は終戦直後に闇市が並び、戦後には地方から出てきた人たちが次々に小料理店を構えた。20〜30年ほど前からチェーン店の居酒屋が増え始め、仕事帰りの会社員がより気軽に飲める街になった。

だが、新橋一帯の愛宕一丁目連合町会の丸哲夫会長（80）によると、コロナ禍前は街を歩く人の多くが会社員らに見えたが、昨夏ごろから若年層が目立つようになった。都の要請に従わない店に吸い寄せられ、路上で飲んだり、大声を上げたりする人も見かけたという。

ある飲食店主も、コロナ禍前は客のほぼ全員が背広姿の会社員だったが、休業明けの10月からは「あまり新橋で見かけないタイプ」の学生風の客が目につくようになったと話した。老舗鳥割烹の店主でもある丸会長は「節度を守りながらも、お酒を楽しむ。それが新橋の良さの一つでもあり。街に落ち着きがなくなり、そういう良さを感じてくれている人が離れるのが

公的な飲み会 再開まだ困難

酒文化に詳しい社会学者で早稲田大学人間科学学術院の橋本健二教授の話。新橋と言えば、周囲に企業オフィスや官公庁が立ち並び「サラリーマンの街」という印象だが、リモートワークが増え、通勤する人自体が減った▽危機管理上、クラスターなどを心配して大人数での飲み会を開きづらくなった、などの理由から、飲み会に出る会社員らの数が減ったのではないかと。一方で、緊急事態宣言下でも営業している店を探して都心近くの繁華街にたどり着いた若者たちが、その後定着し、騒がしい雰囲気を楽しむ会社員らが避けるようになった可能性もある。公的な飲み会が開けない状況はしばらく続くと考えられ、もともと会社員の割合が多かった繁華街では同じような現象が起こるのではないかと。

「一番怖い」と話した。
（山口啓太、御船紗子）